まちづくり・生涯学習情報誌

らしっく

自分らしく、粋なくらし

Vol.64
風花号
2022.11

かざはな／晴天時に雪が風に舞うようにちらちらと降ること。あるいは山などに降り積もった雪が風によって飛ばされ、小雪がちらつく現象のこと。雪が風に乗り、花のように舞う様子から、風花と呼ばれるようになった。

CLOSE UP

「平和」とは何か、今考える
多様性を認め、誰もが暮らしやすい社会を

一般社団法人広島県セクシュアルマイノリティ協会
セクシュアルマイノリティ(LGBT)の理解を広げ
誰もが尊重され暮らしやすい社会を

特定非営利活動法人家族介護者サポートネットワーク・はぴねす
ケアする人もされる人も みんなが幸せになるために
少しずつ芽生えてきたケアラー支援

NPO法人風の家
矯正施設を出ても、行き場を失い
支援を求める人の受け皿となる

連載

▶らしっくレポート　平和への想いを次世代へつなぐ安芸府中高校生 ～英語版 紙芝居「原爆の子さだ子の願い」～
▶らしっくコラム　平和を語る「ことば」の力 ▶ようこそ！公民館へ～安芸区内公民館～ ▶人材バンク 名人 宝人 達人
▶Hm²助成支援団体のご紹介 ▶情報の森 ▶プラザ通信

特集1

セクシュアルマイノリティ（LGBT）の理解を広げ誰もが尊重され暮らしやすい社会を

「OUT IN JAPAN HIROSHIMA」の様子（平成29年12月）

CLOSE UP

「平和」とは何か、今考える

多様性を認め、誰もが暮らしやすい社会を

多様性を認め、人を孤独にさせない社会づくりが、私たちの身近な平和の第一歩です。
誰もが尊重され、暮らしやすい社会を目指し、社会的弱者を支援・理解してほしいと活動している団体を紹介します。

一般社団法人広島県セクシュアルマイノリティ協会

https://kamocafe.main.jp/

他人事と思わないで身近にあるセクシュアルマイノリティのこと

▲「フラワーフェスティバル」で来場者から寄せられた数々のメッセージ

セクシュアルマイノリティ（LGBT）とは性的少数者の総称で、日本における割合は8.9%（11人に1人）とも言われています。身近にあるセクシュアルマイノリティの存在の周知を促進し、当事者同士のつながりやサポート、また理解者を増やすための活動を行っているのが「一般社団法人広島県セクシュアルマイノリティ協会」です。

共同代表理事を務めるのは松村路加（まつむらろか）さんと野元恵水（のもとえみ）さん。

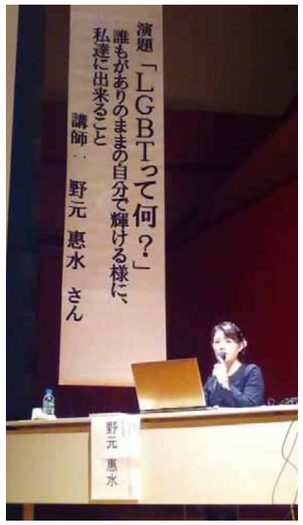
松村さんが活動を始めるきっかけとなったのは平成26年。セクシュアルマイノリティの友人のパートナーが薬の過剰服用で亡くなったことでした。さらにその翌年には、国によって全く異なる法的制度を目の当たりにし、セクシュアルマイノリティの人たちが置かれている状況の理不尽さに強く問題意識を感じた、野元さんと出会い、法人化して活動を始めました。

「発足当時に比べるとセクシュアルマイノリティやLGBTという言葉も身近にはなってきていますが、社会的な認知度はまだまだなんです」と話す松村さん。セクシュアルマイノリティの理解を広めるべく、さまざまな活動を行っています。

まずは知ることから始めてほしい多様性を認められる社会のために

同会ではセクシュアルマイノリティ同士の親睦や交流をはじめ、フラワーフェスティバルや啓発イベント・ヒューマンフェスタへのブース出展、同イベント企画「広島城レインボーライトアップ」点灯式の実現、コミュニティの創設と運営など、多方面において活動をしています。なかでもLGBTフレンドリー（LGBTに対して協力的な姿勢を示す個人や組織）の企業より要望を受け「レインボーサポート運動」を開始。社員等を対象に、セクシュアルマイノリティに関する研修や社内で当事者が働きやすい環境を整える取り組みを行っており、日常生活のちょっとした配慮を実践することにより誰もが暮らしやすい地域社会を目指しています。「職場や学校など、社会との接点となる場所では当事者がなかなかカミングアウトしづらく1人で悩みを抱えやすい状況にあります」と現状をみつめる松村さん。

▲「OUT IN JAPAN HIROSHIMA」の様子（平成29年12月）



▲ 講演会の様子

「きっとわかってもらえない」と諦め、孤独に生きている方も少なくないそうで「一人ひとりの価値感が違うように、セクシュアルマイノリティも当たり前の存在として認められなければいけません。その為には周りの理解が重要なんです」。

誰もが人権を尊重され、暮らしやすい社会の実現のために「他人を思いやる心」は、いますぐにでも意識することができます。それは見えないからこそ大切にしたい尊いもので、多様性を認められる社会の実現のために重要なことだと感じました。

令和4年12月10日（土）交流イベントの予定

広島市内にて自死遺族に寄り添う団体、LGBTフレンドリーの医師との交流。

性別違和を抱えるトランスジェンダーの若者が必要な医療を受けやすいように、啓発イベントを実施。

※詳細は当団体HPよりお問い合わせください。

らしっく
自分らしく、粋なくらし
Vol.64
花曇号
2022.11

contents

01 特集
「平和」とは何か、今考える
多様性を認め、誰もが暮らしやすい社会を
▶一般社団法人広島県セクシュアルマイノリティ協会
▶特定非営利活動法人家族介護者サポートネットワーク・はぴねす
▶NPO法人風の家
「フラワーフェスティバル」にブース出展した様子
利用者とワークショップで作ったクリスマスアレンジ
「作業所」の様子
05 らしっくレポート ひろ記者が行く
▶平和への想いを次世代へつなぐ安芸府中高校生 ～英語版 紙芝居「原爆の子さだ子の願い」～
らしっくコラム
▶平和を語る「ことば」の力 安田女子大学 川岸 克己 教授
06 ようこそ！公民館へ
▶安芸区内公民館
07 人材バンク 名人 宝人 達人
▶英会話講師／フィリピン文化講習／ポップスシンガー 山出 ベベさん
▶広島の鉄の文化・神川平助と国兼池 足利 宏二さん
09 Hm²助成支援団体のご紹介
▶NPO法人BUKATSU
▶宿題やっつけ隊
▶えほんとあそびのちいさな部屋
11 情報の森
15 プラザ通信

※掲載している各団体への問い合わせは発行者である（公財）広島市文化財団まちづくり市民交流プラザまでお願いします。☎082-545-3911

ケアする人もされる人も みんなが幸せになるために 少しずつ芽生えてきたケアラー支援

特定非営利活動法人家族介護者サポートネットワーク・はぴねす

http://carers-happiness.net/

突然はじまる介護生活　いざという時のために

「介護生活は突然やってきます。何も分からないまま躊躇する時間さえなく始まり、生活が一変します」と話すのは、平成28年5月に設立した「特定非営利活動法人家族介護者サポートネットワーク・はぴねす」の代表を務める北川朝子（きたがわともこ）さん。自らも家族介護を経験し、介護者の苦悩と苦労を実感。「きっと私と同じような思いをしている人が世の中にはたくさんいる、この思いを共有し少しでも役立てることができたら」と同団体の発足を決意しました。現在、全国介護者支援団体連合会の正会員としても全国にネットワークを持ち活動しています。

ボランティアスタッフと共に「ケアラーズカフェ&キッチンはぴねす」を拠点に、在宅介護などによるケアラー（無償介護者）の相談窓口となり、介護情報の提供や社会から孤立しがちなケアラーに専門家や介護経験者らと一緒に悩みの解決策を考えたり、介護の合間のリフレッシュできる空間を提供。また、ケアするあなたが孤立しないようにとのメッセージが込められたハンドブック「ケアラー手帳」「在宅介護者手帳」を無料配布しています。この手帳は、要介護者の情報をひとまとめにでき、いざというときの連絡先を記載できる便利なツールです。

介護を日常にするためにさまざまな選択肢があることを知ることが重要

毎年1回、「オールデイ認知症カフェ」と称して公民館で啓発イベントも開催。令和4年7月には総勢50人にのぼるボランティアと協力スタッフが集結し、来場者に「認知症の正しい理解」を呼びかけました。「発足して6年。まいた種が芽生えてくれていると感じ嬉しく思います」と発足当初を振り返る北川さん。今では北川さんの思いに賛同し活動してくれる仲間が増え、ケアラーにも大学教授や医療関係の専門知識を伝えることが可能となりました。介護といってもケースはさまざま。高齢者や障害者、子育てしながらのダブルケアラー、最近社会問題にもなっているヤングケアラーなど、それぞれの悩みに的確な支援やアドバイスで寄り添います。いざという時に選択できる知識があれば、あきらめることなく自分たちにあった環境づくりができる、これは介護生活を大きく左右するといっても過言ではないと感じます。現在、日本の高齢化率は、令和17年に30%を超えると予測されています。要介護（要支援）者の認定数は毎年増加し、少子化の問題も加わり介護は決してひとごとではありません。身近ではあるけれど、当事者にならないと実感しない介護問題。その時に落ち着いて冷静に考えられる知識を身に着けることは、いざという時に重要になります。

「育児が日常であるように、介護もスタンダードになってほしい。介護のハードルをもっと下げて世の中に溶け込むことができたら」と北川さんは願ってやみません。

▲ 代表の北川朝子さん

▲「ケアラー手帳」「在宅介護者手帳」

▲「ケアラーズカフェ&キッチンはぴねす」

矯正施設を出ても、行き場を失い支援を求める人の受け皿となる

NPO法人風の家

http://kazenoie.jp/wp/

社会の中で安心して生活でき 再犯をすることなく暮らせる環境を目指して

「NPO法人風の家」は元受刑者が、犯罪から回復し社会復帰するための支援団体として平成22年に設立しました。矯正施設を出た人を、自立に必要な指導や援助等を行う、更生保護施設の職員だった初代理事長が、更生保護施設を退所しても社会に順応できない人がいる現実を目の当たりにし、さらなる支援が必要と考え仲間と立ち上げました。

「刑務所、少年院といった矯正施設などを出て行き場のない人たちが、社会の中で安心して、再犯をすることなく暮らしていけるように支援しています。特に、高齢者、障害者などは、仕事につくことや日常生活を一人で送ることに困難を抱えやすく、支援には専門的な知識も必要とされますが、困窮している彼らの心を開かせることがより重要と思っています。地域の中で暮らし始めた後にも、さまざまな形で支援が必要になりますが、私たちはそのサポートの一つとして作業所を開設しています。」と現在三代目の理事長を務める大原嘉樹（おおはらよしき）さん。

作業所には風の家の居室を利用している人を含め、現在約40人が登録していますが、通所する人は1日平均8人で、日によって5人から12人と変わります。内職作業を平日10時～15時まで行っています。作業はカードキーケース折りや帳票の整え、リーフレットへのサンプル貼付などです。その他夏には盆灯篭を、年末にはしめ縄飾りを作っています。作業をしている人には、食堂での食事支援も行っています。

▲「風の家」の宿泊部屋

住居や食事のサポートはもちろん 傷ついた心のサポートも

作業所以外にも、行き場のない人のために基本的な生活の場を提供し、温かい食事の提供、仕事探し、住居探しなど、社会生活を始めるまでの移行を支え、更に社会生活が安定して維持できるような支援もしています。

「来所する人は、さまざまな背景を抱えており、私たちにとっては当たり前の言葉であっても、彼らにとっては傷つくこともあります。私たちスタッフは、彼らに対しては慎重に言葉を選び、声掛けしています」。

本来であれば、矯正施設で学び、社会に戻るのが普通の姿であり、厳しい見方をすれば、風の家の様な施設が無くても問題なく生活ができる社会の方が望ましいのかもしれません。しかし、実際には社会に出ると、さまざまなトラブルが起き、彼らが傷つき、再び矯正施設に入ることになる可能性があります。そういった観点からも、このような彼らをサポートする施設が必要とされています。「行き場所を失い支援が必要な人に対しては、理解がある受け皿でないと難しい。これからも『風の家』が彼らの受け皿となり、支援を継続して、少しでも多くの人を救うことができれば」と大原さん。

▲ 理事長の大原嘉樹さん

罪を犯してしまった人も償って普通の生活をする権利があります。その支援を行政だけでなく、このような団体も担っています。国の支援はあるものの、今後も担い手の育成や活動資金など多くのサポートが必要とされます。

元受刑者や生活困窮者が、社会の中で安心して暮らせることは、私たちが安心して暮らせることにつながっています。少しでも人を孤独にさせない環境づくりが、社会平和の第一歩だと感じました。

▲ 食事支援の様子